

# 課題解決型の授業を「メタ授業」として提示する試み — 「初等国語科指導法」の授業改善を中心として—

■ 吉田茂樹 (高知大学教育研究部人文科学系 教育学部門 准教授)

## はじめに

平成26(2014)年度より高知大学に赴任し、「初等国語科指導法」を担当することになった。赴任する以前は、県教育委員会の指導主事として、小学校・中学校・高等学校・特別支援学校を年間約80校訪問し、年間延べ約200人に及ぶ現場の教員に対して、国語科授業の改善に関する指導・助言を行っていた。その中で、教育実習生と初任者の指導に話が及ぶと、すべての校種の教員から、大学における授業の内容が、教育実習の指導にも、実際に教員となってからの指導にも、ほとんど役に立っていないという厳しい批判がなされていた。教育実習生や初任者に欠如していると指摘された内容は、具体的に以下の三点であった。第一に「学習指導案が書けない」「授業が組み立てられない」「板書ができない」など、実際に国語科授業を展開する際に必須となる技能・方法が欠如しているという点。第二に「発声の仕方が悪い」「表情が固い」「言葉遣いが乱暴」など、教員として必要とされる基本的な指導技術が欠如しているという点。第三に「児童生徒への愛情が感じられない」「児童生徒の理解が甘い」「社会人としての自覚に欠ける」など、教員として当然持っていなければならない姿勢が欠如しているという点である。これらの教員として不可欠な技能・方法や指導技術・姿勢を、「教育実習に来てから」または「採用さ

れて初任者になってから」身につけさせるのでは手遅れであるという指摘も多くなされていた。

「教科指導法」や「教科教育法」などの教員養成に関する科目は、大学の授業である限り、学問的な探究を目指すべきものでなくてはならない。しかし、それと同時に、実際の教育実習や教育現場に接続するものでなくてはならないと考えている。つまり、「初等国語科指導法」においては、まずは教育実習において、さらには将来小学校教員として教壇に立った際に、国語科の授業を適切に展開できるだけの力量を、受講者全員に身につけることが求められているのである。しかし、前述したように、残念ながら「初等国語科指導法」を初めとする教員養成に関する授業の内容は、学校現場の教員からも受講生からも「実践に役立つ」と評価されているとは言えないのが現実である。

そこで、本稿では、まずはこのような現実を謙虚に受け止め、大学の授業の内容が、何らかの形で「実践に役立つ」と学校現場の教員や受講生に認識・自覚されるための授業改善について考察していくものとする。考察にあたっては、まず学部の授業改善について論述された、世羅博昭(2003)と町田守弘(2008)とを先行研究として取り上げる。両氏による学部の授業改善についての主張を比較することで、「初等国語科指導法」における授業改善の視点を明らかにする。さら

に、平成26(2014)年度に吉田が実施した、「初等国語科指導法(受講者38名)」における授業実践例を挙げて、その成果と課題を明らかにする。

## 1 先行研究のまとめ

教員養成に関する学部の授業改善を扱った論文から、世羅博昭(2003)「目標の三層構造化を図った学部授業の試み—『初等国語科授業論』を中心に—」と町田守弘(2008)「『国語科教育法』をどのように扱うか—『メタ授業』としての要素を生かすために—」の二編を取り上げる。世羅は「初等国語科授業論」、町田は「国語科教育法」における授業改善を提案している。両氏とも大学の教員となるまで、長年にわたり高等学校の教諭として教壇に立ち、自ら実践研究を行ってきた経験を持っている。吉田も同じ経歴を持つ者として、この両氏の論考を取り上げることとした。

### (1) 授業の課題

両氏とも、自分が担当している教員養成に関する学部の授業は、何らかの形で教育実習へと接続する科目として位置づけられなければならないという意識を強く持っている。それにもかかわらず、世羅は教育実習の実習校から「教育実習生が、学部でこれまで受けてきた授業は、教育実習でほとんど役立たないと言っていた(p.30)」と聞かされたり、町田は「担当するクラスに対して授業を展開するのに必要な基本的スキルの欠如(p.2)」を指摘されたりする。これらを受けて、両氏は自らの授業を見直し、学部の授業改善に向けた提言を行っている。

まず、受講生に特徴的に見られる傾向を、世羅は「言われたことはするが、自ら進んで課題を出して、課題解決のための学習を展開することはあまりない。よく言われる『指示待ち人間』が多くみられる(p.29)」と述べている。同様の観点から、町田は「苦勞をして尊いものを獲得しようという意識は背景に退いて、徹底したエンターテイメント志向がはびこるようになった(p.1)」と表現している。両氏とも、受講生の授業に対する態度が受動的である点に問題を見出している。

これらの実習校からの指摘や受講生の傾向を考慮し、自分が担当する授業を実践する際の課題を、世羅は「学生自身が主体的、意欲的に取り組む授業の創造が、授業実践上の課題である(p.29)」と述べ、町田も同様の観点から「『国語科教育法』の授業に求められるのは、授業の活性化という要素である。単なる資格取得のための教科という意識を払拭して、受講者がより積極的かつ主体的な姿勢で取り組むように導く必要がある(p.13)」と表現している。両氏とも、受講者が「主体的」「意欲的」「積極的」な姿勢で取り組むことができる授業を創造することを課題としている。

### (2) 授業改善の視点

#### ① 世羅博昭による「授業改善の視点と方法」

前述した授業の課題を受け、世羅は「授業改善の視点と方法」として、以下の三点を挙げている(pp.29-30)。

- ア. 受講生に課題意識を持たせて、課題解決型の授業展開を図る。
- イ. 実践の場とのつながりを常に意識させ、実践に役立つ授業を創造する。
- ウ. 「目標の三層構造化」を図った授業を展開する。

アは、大学において自らが「学習課題を設定して、その学習課題の解決を目指して、課題解決型の授業を展開する(p.30)」ことで、受講生の課題解決力(→自己学習力)を育成しようとするものである。つまり、大学における自らの課題解決型の授業をモデルとして、「受講生に、自ら考える習慣を養うとともに、真に学ぶことのおもしろさ・楽しさに気づかせていきたい(p.29)」と考えられた方法である。

イは、「教員養成大学・学部における授業は、当然のことながら、すべての授業が何らかの形で、実践の場に生きて働く、役に立つものでなければならない(p.30)」との考えから設定された方法である。世羅は、「(1) 授業の課題」で述べた、教育実習の実習校からの指摘を真摯に受け止め、この課題を克服するために「国

語科教育学の授業内容が、小学校・中学校・高等学校における実際の国語科教育と、どこで、どのようにつながるのかを、受講生に認識させる授業づくりが必要である(p.30)」とし、「実践の場に生きて働く、役に立つ(p.30)」方法を具体的に提案している。

ウは、これまで述べたア・イの実践課題を克服するために、「目標の三層構造化」を図った授業を創造すべきであるという主張である。「目標の三層構造化」を図った授業とは、『内容に関する目標』『技術に関する目標』『方法に関する目標』という三つの目標を同時に成立させる授業(p.30)」のことを言う。つまり、課題解決型の授業を通して国語科教育学の内容を学ばせる(「内容に関する目標」)過程で、受講者自身に言語能力や言語事項に関する能力と課題解決能力とを身につけさせる(「技術に関する目標」)とともに、児童生徒の言語能力や言語事項に関する能力と課題解決能力とを育てる指導方法をも学ばせる(「方法に関する目標」)構造を持った授業のことである。

世羅の「目標の三層構造化」を図った授業を簡略に図式化すると以下ようになる。

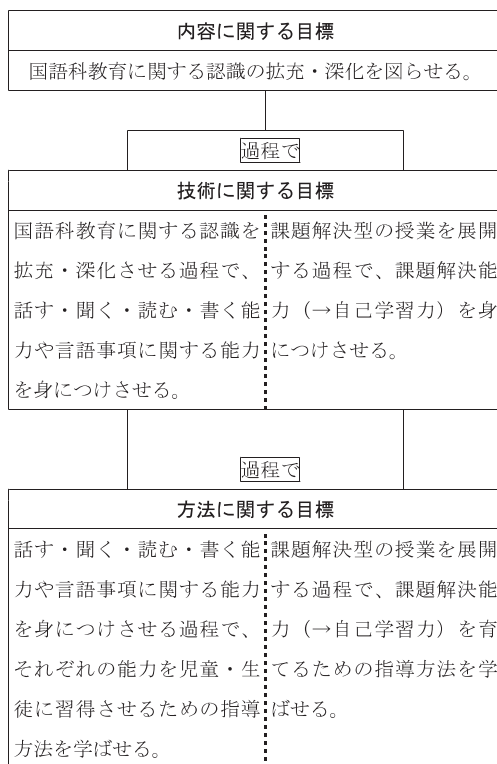


図1 「目標の三層構造化」を図った授業(世羅,2003)

## ② 町田守弘による「基本的な授業の方向」

町田は「『国語科教育法』の授業をどのように展開するのか」についての「基本的な授業の方向」として、以下の三点を挙げている。(p.4)

ア. 中学校・高等学校の教育現場との交流を重視する。

イ. 講義法による授業より受講者の研究発表および模擬授業を中心とした授業を展開する。

ウ. 「国語科教育法」の授業そのものをテキストとした入れ子構造型の授業を目指す。

アは、世羅の「イ. 実践の場とのつながりを常に意識させ、実践に役立つ授業を創造する」と対応する。町田も、「受講生が単に大学の教室という空間で授業を受けるだけでなく、中学・高校の現場と様々な形で結ばれるように配慮する(p.4)」と述べているように、学校現場とのつながりを重視している。しかし、世羅が、大学における国語科教育学の授業内容と、小・中・高等学校における実際の国語科教育とのつながりに絞って論述しているのに対し、町田は、「教育現場の状況および教師の仕事の実態(p.5)」など、教育活動全般における連携を視野に入れた論述を行っているところに相違点がある。

イ・ウは、町田の言う「メタ授業」の要素を生かすための方法である。「メタ授業」の要素を生かすとは、「『国語科教育法』の授業そのものを、学習者すなわち受講者の学生に対する配慮が明確になるように展開することが授業の基本的な方向性(p.3)」であり、「その授業を受講した学生は、まさに身をもって授業のスキルを体得することができる(p.3)」と説明されている。つまり、大学の授業そのものを学校現場における実際の国語科教育のモデルとして機能するように展開させるという提言である。町田は、「メタ授業」の要素を生かすために二種類の方法を提示している。第一の方法は、イにあるように模擬授業や研究発表を中心とした学びを展開することである。模擬授業や研究発表は、受け身的な受講態度では成立しないので、自ら課題を

見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に考えて判断し、行動せざるを得なくなる。自ら授業を組み立てて実施し、さらに、他の受講者の模擬授業に参加するその過程で、「授業展開のための基本的なスキルの習得(p.6)」が図られる構造である。

第二の方法は、ウにあるように、大学教員が行う教科教育法の授業自体を、学校現場における実際の国語科教育のモデルとなるように展開するというものである。町田はこれを、『国語科教育法』の授業そのものを『テキスト』として受講者に提供する(p.6)」と表現している。具体的な効果としては、「大学の教職課程における教科教育法の授業において、授業のスタイルそれ自体を提供する機会を設けることができれば、受講者の授業構想に実際に役立つことができる(p.7)」と説明されている。

### ③ 「メタ授業」によって身につく能力の想定—世羅博昭(2003)と町田守弘(2008)との共通点と相違点から—

町田の「メタ授業」の要素を生かすための方法であるイ・ウは、基本的に世羅の考え方とも共通している。世羅は「ア. 受講生に課題意識を持たせて、課題解決型の授業展開を図る」において、受講生に課題解決能力を身につけさせるためには、「受講生の興味・関心や問題意識（→これは育てるものだが）をふまえた学習課題を設定して、その学習課題の解決を目指して、課題解決型の学習を展開することが必要である(pp. 29-30)」と述べている。世羅は町田と同様に、自らの大学における授業を、小・中・高等学校における実際の国語科教育のモデルとなるように展開するという、「メタ授業」としての機能を担ったものとして構成している。さらに、世羅の提唱する「ウ. 『目標の三層構造化』を図った授業を展開する」においては、大学の授業で、国語科教育に関する学習課題（内容）の解決を課題解決型の授業において展開する過程で、受講者に言語能力や課題解決能力（技能）が身につくとともに、児童生徒の言語能力や課題解決能力を育てる指導方法も学んでいくという構造が主張されている。これ

はまさに、町田の言うところの『国語科教育法』の授業そのものをテキストとした入れ子構造型の授業」そのものと言える。

ただし、世羅と町田の「メタ授業」についての考え方には、つけるべき能力についての想定に相違点がある。前述したように、世羅は国語科教育学の授業内容に絞って論述している。そのため、つけるべき力を「内容に関する目標」「技能に関する目標」「方法に関する目標」の三点に集約して述べている。一方、町田は、教育活動全般において必要となる能力を視野に入れた論述を行っている。そのため、たとえば、声の大きさ、指名の仕方、発問と指示の方法など、町田が「一人ひとりの学習者に対する配慮」と表現する、教員として必要とされる基本的な指導技術や、「国語教師としての基本的な姿勢(p.13)」をも含む内容となっている。

以上から、大学の「教科指導法」や「教科教育法」を「メタ授業」として、受講生に身につく能力は、以下のようにまとめられると考えられる。

内 容 国語科教育に関する認識	教員として基本的な指導技術	国語教師としての基本的な姿勢
技 能 ①言語能力 ②課題解決力		
方 法 ①言語能力を習得させるための指導方法 ②課題解決力を育てるための指導方法		
	・声の大きさ ・指名の仕方 など	

図2 「メタ授業」によって身につく能力

## 2 「初等国語科指導法」における授業改善の視点と方法

「初等国語科指導法」は、小学校教諭一種免許状取得のために履修する科目であり、高知大学教育学部学校教育教員養成課程においては卒業要件となっている。さらに、「初等国語科指導法」は、教育実習に接続する科目として位置づけられている。毎年9月に附属小学

校で行われる教育実習においては、受講した学生全員に、国語科の学習指導案の作成と研究授業の実施が課せられるのが通例となっている。

高知大学の学生は、授業への出席率も高く、与えられた課題に真面目に取り組む。提示された課題はそつなくこなすが、授業に臨む姿勢は多くの学生が受動的で、自分から進んで工夫をすることは少ない。課題に対して、自力で試行錯誤して「自分なりの答え」を導き出すというよりも、失敗しないようにすぐにマニュアル(正解)を求める傾向が強い。このような現状を踏まえて、受講者が「主体的」「意欲的」「積極的」な姿勢で取り組むことができる授業を創造することが課題であると考えた。

「初等国語科指導法」における授業改善の視点を、以下に三点あげる。

#### (1) 課題解決型の授業を展開できる能力の育成を図る

国語科教員の役割は、学習者に「生きる力」——すなわち「自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に考えて判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力」を身につけさせることにある。したがって、大学では、学校現場において、課題解決型の授業を展開できるだけの能力を身につけた学生を育成することが求められる。

課題解決のための能力とは、学習場面において、これまでに身に付けた知識や技能などを使って、課題を認識し、情報を収集・分析するなどして、解決方法を見出し、実行していく力であると考え。課題解決の能力は、目の前に出現した課題を「自分の問題」として受け止め、自力で解決を図っていく、その切実な経験の場において身につくものである。そのためにも、大学においても課題解決型の授業を展開し、実際に目の前の課題を解決していく過程を通して学び方を学ばせる指導方法が効果的であると考えた。

そこで、大学において課題解決型の授業を展開する指導方法として、「初等国語科指導法」の15時間(実質17時間)を「模擬授業(小学校)を実施しよう!」という一つの単元に構成して実施することとした。受

講生は全員「模擬授業を実施する」という単元のゴールに向けて、これまでに身に付けた知識や技能などを使って、課題を認識し、情報を収集・分析するなどして、解決方法を見出し、実行していく学習活動を展開することになる。これによって、「国語科の目標を理解すること」や「学習指導要領の内容を理解すること」など、単位時間の一つひとつの学習が課題解決の過程として機能するようになる。つまり、受講生は、課題解決のプロセスを踏みながら学習活動を進めていくことになる。同時に、自分が模擬授業を実施するためには、課題を「自分の問題」として受け止めざるを得ないため、受講生の「主体的」「意欲的」「積極的」な学びを促す手立てにもなる。

#### (2) 自らの授業を課題解決型の「メタ授業」として提示する

受講生である大学生が思い浮かべる授業のスタイルは、自分がこれまで小学校・中学校・高等学校で受けてきた授業が基になっている。特に、中学校・高等学校の教員は、大学時代にほとんど国語科教育学の研究を専門としていないので、多くの授業が文学を中心とした講義式の一斉授業になると言われている。国語科教育で指導すべき内容は、「読むこと」の他に「話すこと・聞くこと」「書くこと」「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」と多岐にわたるが、これらの領域・事項が実際の授業において効果的に展開されているかどうかは疑問である。このような、「読むこと」を中心とした講義式の一斉授業ばかり受けてきた学生には、そのスタイルが「メタ授業」として定着してしまっている。したがって、学生が教員となった時にも、同じスタイルの授業を繰り返すことになってしまう。

そこで吉田は、「初等国語科指導法」において、受講生の内的なモデルとなるような授業を展開したいと考えた。つまり、「初等国語科指導法」の授業自体を、学校現場における実際の国語科教育のモデルとなるように展開するというものである。具体的には、「模擬授業を実施する」ということを課題とした課題解決型の授業展開を図る過程で、図2に示した国語科授業を展

開する上で必要な能力を身につけさせることを目指している。受講者が吉田の授業内容・形式、および吉田の授業自体、さらには教員としての吉田そのものから、国語科授業を展開する上で必要な「内容」「技能」「方法」、さらには「教員として必要な指導技術」や「国語教師としての基本的な姿勢」に至るまでの能力を習得することができる授業を構築する。

### (3) 教育実習と大学の学びとを有機的に連携させる

今井敏博(1998)は、教育実習事後指導における学生の発言を報告している。今井の担当した分科会のテーマは「大学の授業と教育実習」である。その中で、次のような学生の発言が記録されている。

S2: 3回生までで大学で学んだことで教育実習に実際 役立ったことは少なかったと思う。大学の授業と教育実習とを全く別のものとしてとらえてしまっている。これは学生にも教官にもいえるのではないか。(p.122)

S8: 技術的なことは子どもがいるところで学んだ方がよいように思うが、指導案のことを実習までまったく知らないのでは困るのではないか。(p.123)

双方とも、大学の授業と教育実習が接続していないことに対する批判である。ここからは、受講生たちが、教育実習において不可欠となる学習指導案を作成する方法など、「実践に役立つ」知識・技能・方法を求めている様子が見て取れる。

国語科教育学関係の授業は、大学の授業である限り、学問的な探究を目指すべきものでなくてはならない。しかし、それと同時に、実際の教育実習や学校現場に接続するものでなくてはならない。おそらく、教科教育に関する授業を担当している大学教員は、吉田を含めて全員が、自分の授業は「実践に役立つ」と考えて実施しているに違いない。問題は、これまで述べてきたように、教育現場の教員や教育実習を終えた受講生が、そのようには評価していないという点にある。

そこで吉田は、「模擬授業(小学校)を実施しよう!」という一つの単元に構成した「初等国語科指導法」において、「学習指導案を作成する」という単元を貫く言

語活動を設定することにした。「学習指導案を作成する」という教育実習において必要不可欠な言語活動を単元の軸に据えることで、受講者に大学の授業と学校現場との接続を強く意識させることを目指している。ここでは、単に学習指導案を作成するためのスキルを指導することを目標とはしていない。「学習指導案を作成する」という言語活動を通して、国語科の目標や授業を構成する方法など、国語科教育学の内容・技能・方法を指導することをねらいとしている。

なお、教育実習と大学の授業とを連携させるための別な試みとして、附属小学校の教諭を招聘し、受講生に模擬授業を実施している。

## 3 「初等国語科指導法」の授業の実際

### (1) 「初等国語科指導」の目的と単元構成

平成26(2014)年度の「初等国語科指導法」に関するシラバスは、高知大学に赴任する2か月前に、以下のように作成した。高知大学の学生の気質や実習校である附属小学校との関係など、不明な点が多くある中で作成したものである。

#### 1 授業全体の概要

小学校国語科の学習指導法についての見識を養うために、小学校国語科の目的・構造・方法を理解し、単元構成・学習指導の工夫等に関する知見を得る。実際に様々な言語活動を体験することで、小学校で国語科の指導を行う際に必要となる言語能力やコミュニケーション能力を培う。小学校の国語科教科書を題材にして、教材研究・学習指導案の作成、及び模擬授業を実施する。

#### 2 授業概要

第1週 授業のガイダンス

第2週 小学校国語科の教科構造、小学校国語科の目標及び内容

第3週 話すこと、聞くことの学習指導について

第4週 書くことの学習指導について

第5週 読むことの学習指導について

- 第6週 伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項の学習指導について
- 第7週 学習指導案作成の注意点と書き方1
- 第8週 学習指導案作成の注意点と書き方2
- 第9週 「学習指導案A（文学的文章）」の作成
- 第10週 「学習指導案A」の提出 模擬授業①  
実際の授業研究（DVD-1）
- 第11週 「学習指導案A」の解説と指導方法の協議  
「学習指導案B（説明的文章）」の作成
- 第12週 「学習指導案B」の提出 模擬授業②  
実際の授業研究（DVD-2）
- 第13週 「学習指導案B」の解説と指導方法の協議  
「学習指導案C（伝統的な言語文化）」の作成
- 第14週 「学習指導案C」の提出 模擬授業③  
実際の授業研究（DVD-3）
- 第15週 「学習指導案C」の解説と指導方法の協議  
講義全般の総括

以上のように、当初は「講義全体の概要」と「授業概要」を考えていたが、実際の授業では、次にあげる三点の理由により、以下のように修正して受講生に提示した。

まず第一に、当初の授業構想では、授業の導入がありきたりで、受講生の興味・関心を喚起するものではないと判断したためである。そこで、受講生一人ひとりの授業に参加する意欲を高めるために、単元の導入部分で「私が目指す教師像」という題目で1分間スピーチを設定することとした。これは、講義式の一斉授業を主に受けてきた受講生に対して、「言語活動を通して学ぶ」授業のモデルを体験させて、単元の構造を実感させる意味もある。

第二に、当初の授業構想では、模擬授業①②③の実施を予定していたが、受講者全員を対象とするものではなかった。「実践で役に立つ」内容・技能・方法は、実践を通して経験的に身につけるしかない。そこで、二段階に分けて受講者全員で模擬授業を実施することとした。まずは、正規の授業時間4時間を使って、各

班の代表者により受講者全員への模擬授業を実施する。さらに、受講生は5班に分かれ、それぞれの班ごとに全員が模擬授業を実施する設定とした。

第三に、当初の授業構想では、学習指導案を作成する方法を学んだ後に三領域一事項に対する概論を受講し、最終的にそれらの知識を活用して実際に一人ひとりが学習指導案を作成するという、それぞれの関連性が直接に見えにくい構造であった。そこで、まず扱う文種を文学的文章（「大造じいさんとがん」）に絞り、「学習指導案を作成する」という課題を解決する過程で、必然的に必要となる国語科教育学の内容・技能・方法を学ばせる構造とした。

## 1 授業の目的と内容

- ①小学校で国語科を指導するための基本的な知識・技能を身に付ける。
- ②小学校で国語科の指導を行う際に必要となる言語能力（話す・聞く・書く・読む）やコミュニケーション能力、課題解決能力を培う。
- ③小学校で国語科を指導する内容や方法を言語活動を通して理解する。

## 2 授業概要

### 単元 「模擬授業（小学校）を実施しよう！」

#### 第1次 国語科の基本的な単元構造を理解する

第1週 教員として必要な言語能力を実感しよう！

（オリエンテーション）

（1分間音読）（1分間のモデルスピーチ）

（スピーチの取材活動）

第2週 「国語科授業」の基本構造を理解しよう！

（1分間スピーチ「私が目指す教師像」）

#### 第2次 「大造じいさんとがん」の学習指導案を作成する

第3週 「小学校学習指導要領解説（国語編）」の

基本構造を理解しよう！

- 第4週 「学習指導案」を書こう！1—「指導事項」と「言語活動」を設定する—
- 第5週 「学習指導案」を書こう！2—「単元を貫く言語活動」を設定する—
- 第6週 「学習指導案」を書こう！3—「板書」を作成する—
- 第7週 「学習指導案」を書こう！4—「評価規準」を設定する—
- 第8週 「学習指導案」を書こう！5—「伝統的な言語文化」の授業構造を理解する—
- 第9週 現場の先生の「授業づくり」を体感しよう！—実際の授業から「指導事項」と「言語活動」の仕組みを分析する—

### 第3次 自分が選択した教材で学習指導案を作成して模擬授業を実施する

- 第10週 班別代表模擬授業①を実施しよう！
- 第11週 班別代表模擬授業②を実施しよう！
- 第12週 班別代表模擬授業③を実施しよう！
- 第13週 班別代表模擬授業④を実施しよう！
- 第14週 班別模擬授業（全員参加）を実施しよう！  
(3時間配当)
- 第15週 高知県の教員採用試験（小学校国語）に挑戦しよう！

## (2) 「初等国語科指導法」の授業の概略

### ① 「第1次 国語科の基本的な単元構造を理解する」の授業

第1次では、典型的な「言語活動を通して学ぶ」授業を、吉田が自ら受講者に実践した。自らが実践して見せることによって、講義式の一斉授業を主に受けてきた受講生に、「言語活動を通して学ぶ」授業を実際に体験させ、国語科授業の内的モデルとして定着を図ろうと考えたからである。具体的には、第1週・第2週の授業を、次のように展開した。

#### ア 第1週の授業の概略

第1週の授業は、「教員として必要な言語能力を実感しよう！」という学習課題を設定し、次の手順で展開した。

- (ア) あらかじめ準備した300字の文章を、まず吉田が時計を見ずに1分間丁度で音読して見せた。その後、発声・発音・速さ・姿勢に注意して「1分間音読」をゲーム的に行う。
- (イ) 次回、「私が目指す教師像」という題目で1分間スピーチを行うと解決すべき課題を提示する。
- (ウ) 「『私が目指す教師像』を漢字一字で表すと『○』です。……という理由で『○』を選びました」を書き出しとする、300字のスピーチ原稿を作成していただくことを課題として指示する。
- (エ) 吉田が時計を見ずに1分間丁度のモデルスピーチを行う。(内容・構成は同じ)
- (オ) 「『私が目指す教師像』を漢字一文字で表現する」とし、一人ひとりに作業用のプリントを配布する。プリントの色は10色準備し、自分が選んだ漢字のイメージに一番近い色を選ぶ。

いいね！	<h1>誠</h1>	初等国語科指導法
★ ★ ★		私が目指す教師像！
<input type="radio"/> 理由説明 (二字の熟語にして説明する)		
<input type="radio"/> 感想		

- (カ) プリントに筆ペンで大きく漢字一字を書写し、選択した理由を漢字二文字の熟語にして説明する。
- (キ) 四人グループで回覧し、感想の欄にそれぞれのコメントを記入する。



- (ク) 他の班員が記述した感想欄のコメントを読む。
- (ケ) 自分が選んだ用紙の色と漢字一文字の関係を班員に伝え、コメントをもらう。

#### イ 第2週の授業の概略

第2週の授業は、『『国語科授業』の基本構造を理解しよう!』という学習課題を設定し、次の手順で展開した。

- (ア) 自主的に「スピーチ発表会」を運営するために、司会とタイムキーパーを決める。
- (イ) 自分のスピーチを始める前に、直前の受講生のスピーチの内容を15秒程度で要約し、その後に簡単に感想を述べる。
- (ウ) キッチンタイマーをセットし、一人1分でスピーチを実施する。
- (エ) 第1・2週の授業構造を、下図にしたがい、各班ごとに( )部分の活動を考えて発表する。

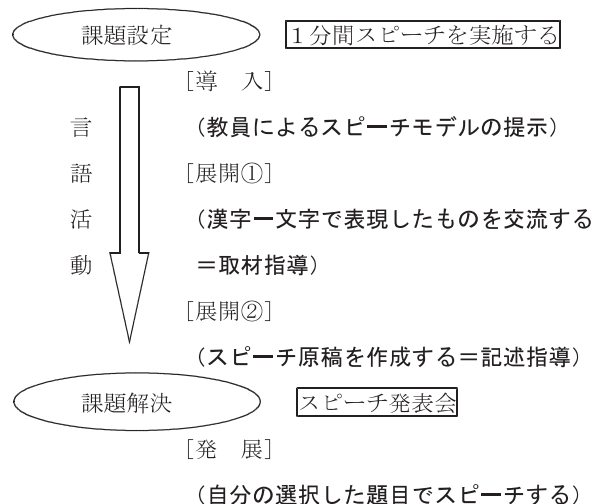


図3 「1分間スピーチをしよう!」の単元構造図

#### ② 「第2次 『大造じいさんとがん』の学習指導案を作成する」の授業

第2次の導入では、まず、前時に作成した単元の構造図を参考にして、本授業における「単元 模擬授業(小学校)を実施しよう!」はどのような授業構造になるのかを考えさせた。下図にしたがい、各班ごとに( )部分の活動を考えて発表させた。

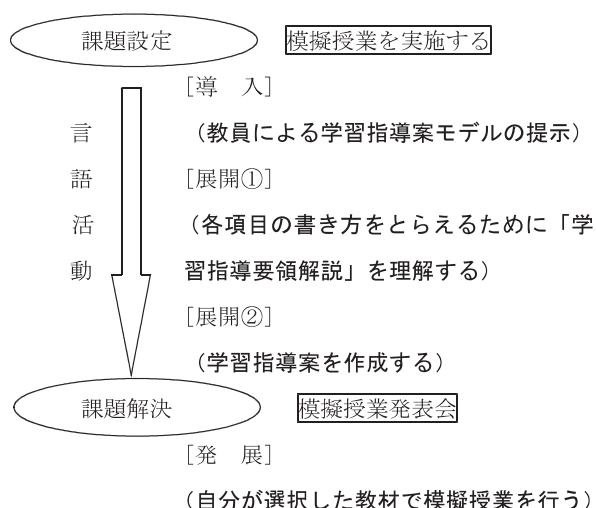


図4 「模擬授業(小学校)を実施しよう!」の単元構造図

これによって、第3週から第9週にわたって行われる、『小学校学習指導要領解説 国語編』を理解するなどの第2次の言語活動が、必然性をもって位置づけられることになる。「『指導事項』と『言語活動』を理解する」「『評価規準』を設定する」などといった一つひとつの言語活動が、単位時間や単元にばらばらに位置づいているのではなく、「模擬授業を実施する」という単元の目標を実現するために、一連の学習活動として段階的に位置づいていることを認識・自覚させることをねらいとしている。ここでは、驚きや発見のある課題解決型の授業を展開した具体例として、第5週の授業を次に挙げる。

#### ア 第5週の授業の概略

第5週の授業は、『『学習指導案』を書こう! 2—『単元を貫く言語活動』を設定する—』という学習課題を設定し、次の手順で展開した。

- (ア) 図3と図4の単元構造図を振り返り、基本的な国語科授業の単元構造を確認する。
- (イ) 「物語の好きな場面を音読劇で表現しよう」という単元において、主教材を『ごんぎつね』で構成する際の単元構造を考えるという課題を提示する。
- (ウ) 班ごとに『ごんぎつね』を分割して音読する。
- (エ) 『ごんぎつね』の授業構造を、下図にしたがい、

各班ごとに( )部分の活動を考えて発表する。

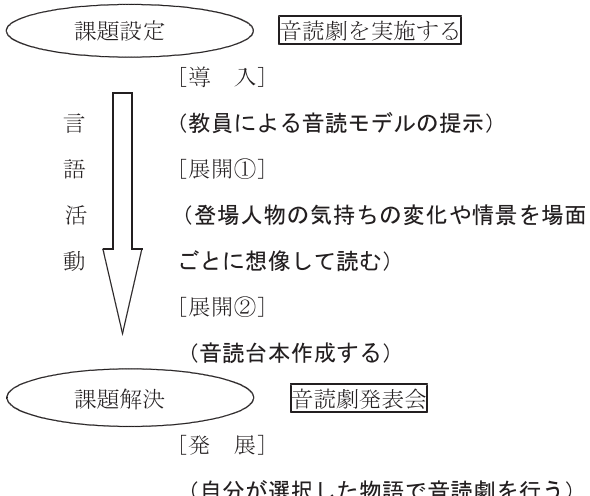


図5 「物語の好きな場面を音読劇で発表しよう」の単元構造図

- (オ) 『大造じいさんとがん』の指導事項を設定する。(本文は事前に読んできている)
- (カ) 考え浮かぶ言語活動をできるだけ多く記述する。(劇・音読劇・紙芝居・ペープサート・漫画・続き物語・群読などが提示された)
- (キ) 「作品のよさを本の帯で紹介しよう」という単元において、主教材を『大造じいさんとがん』で構成する際の単元構造を考えるとという課題を提示する。
- (ク) 『大造じいさんとがん』の授業構造を、下図にしたがい、一人ひとりで( )部分の活動を考えて記述する。

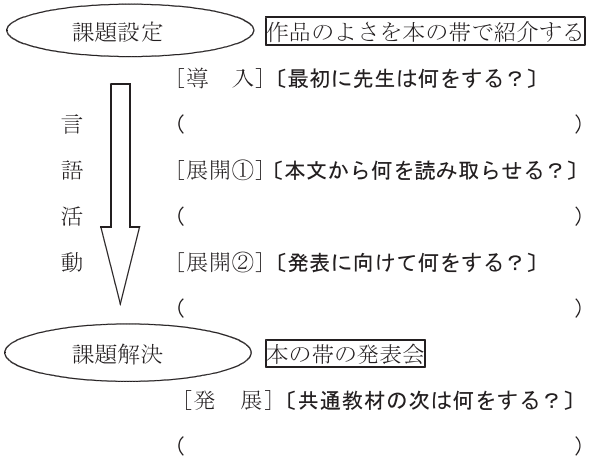


図6 「作品のよさを本の帯で紹介しよう」の単元構造図

- (ケ) 四人グループでそれぞれの項目を比較して修正する。さらに、吉田が作成した学習指導案のモデルと比較して修正する。
- (コ) 「国語科授業づくりの基礎・基本」(水戸部修治編著『小学校国語科 言語活動パーフェクトガイド5・6年』明治図書)を読み、本日の言語活動の意味を論理的に総括する。
- (カ) 吉田が作成した『大造じいさんとがん』の本の帯のモデルを提示し、次回までに、「教師モデル」を作成してくることを課題とした。

③ 「第3次 自分が選択した教材で学習指導案を作成して模擬授業を実施する」の授業

第10週から第13週までの「班別代表模擬授業①②③④」は授業中に、第14週の「班別模擬授業」は土曜日を使って実施した。受講者全員に模擬授業への参加を義務づけた。

模擬授業は受講者が二人組で1時間を担当している。受講者は38名なので、二人組19ペアで編成した。19ペアを以下のように班分けした(( )は人数)。

A班	B班	C班	D班	E班
4ペア(8)	4ペア(8)	4ペア(8)	4ペア(8)	3ペア(6)

通常、小学校の一単位時間は45分であるが、交代の時間等を考慮して一人25分の担当時間とした。授業の前半と後半に分け、二人で50分の授業を担当する。チームティーチングを想定し、机間指導や質問への応答、グループ学習の支援など、すべて二人で対応することとした。「学習指導案(板書計画含む)」「学習プリント」「黒板への掲示物」を準備するように指示した。

ア 第10週から13週の授業の概略

第10週から13週の授業は、「班別代表模擬授業①②③④を実施しよう!」という学習課題を設定し、A~D班の班代表のペアが担当した。吉田が作成した『大造じいさんとがん』の指導案モデルにおける「単元計画(全13時間)」の内、「一の場面(4/13)」から「四の場面(7/13)」の本時案をそれぞれの班が作成するも

のとした。受講している2年生にとって、全教科を通じて初めての模擬授業となるので、それぞれの時間の「学習課題」は、吉田が以下の通り指定した。

A班	一の場面を読んで、大造じいさんの気持ちの変化を読み取ろう。
B班	二の場面を読んで、大造じいさんの気持ちの変化を読み取ろう。
C班	三の場面を読んで、大造じいさんの心はどうして変わったのかを考えよう。
D班	四の場面を読んで、大造じいさんはなぜ残雪を逃がしたのか、気持ちや生き方の変化を読み取ろう。

「班別代表模擬授業①②③④」の授業は、次の手順で展開した。

- (ア) あらかじめ発表するペアと同じ班から、司会とタイムキーパーを選出しておく。
- (イ) 担当ペアから授業概略（指導の目標と方法）を説明する。
- (ウ) 模擬授業を実施する。
- (エ) 模擬授業終了後に「評価シート」を配布し、5分で記入する。
- (オ) 4人グループで授業についての話し合いを行う。
  - a 担当者は、「うまくいった点」「やりにくかった点」を板書する。（いくつでも可）
  - b 参観者は、授業を受けて「上手だと思った点」「やりにくかった点」を一つずつ板書する。（「やりにくかった点」には修正案も簡潔に書く）
- (カ) 吉田が板書事項にコメントを行う。
- (キ) 「評価シート」をすべて担当ペアに渡す。
 

担当ペアは、次の時間までに、「模擬授業のまとめ」として参観者の評価と自分たちの振り返り、吉田からのコメントを次のように整理したレポート（A4：1枚）を作成する。

  - a 多かった評価を「評価された点」「改善点」各2～3項目にしぼって考察する。
  - b 内容ごとにグルーピングして見出しをつける（例えば『板書について』等）

#### イ 第14週の授業の概略

第14週の授業は「班別模擬授業（全員参加）を実施しよう！」という学習課題を設定して実施した。A班～E班の5班が、それぞれ割り振られた教室において、同時展開で授業を実施する形式とした。各教室において、3ペアが1時間ずつ交代で授業を担当する。

「班別代表模擬授業①②③④」では、「C 読むこと」の領域を扱ったので、ここでは「A 話すこと・聞くこと」「B 書くこと」「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」の領域・事項に関わる以下の教材から各ペアに選択させた。教材は教育実習校である附属小学校が使用している東京書籍の教科書から、次の三つの教材を吉田が選択した。

- (ア) A 話すこと・聞くこと  
「選んだ理由を話そう」（3年）
- (イ) B 書くこと  
「こんなことしたよ」（1年）
- (ウ) 伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項  
「枕草子」（5年）

学習指導案を作成する前に、以下の単元構造図を提出して点検を受けることとした。

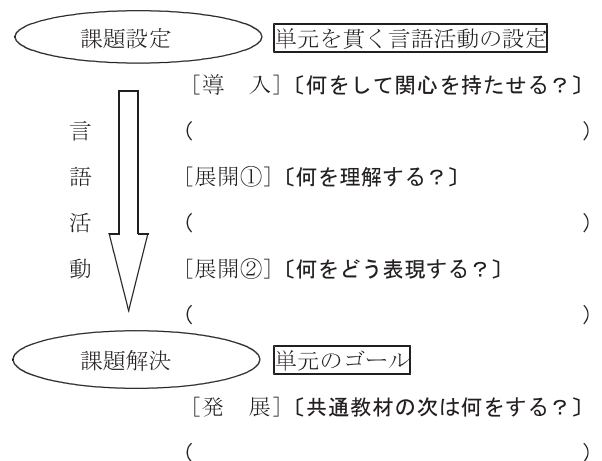


図7 「班別模擬授業」で使用したの単元構造図

授業の実施手順は、「班別代表模擬授業」と基本的に同じである。

#### 4 平成26(2014)年度「初等国語科指導法」の成果と課題

最終回の授業で、「授業評価アンケート」を実施した。

主なものを、受講生の表現のままに抜粋して掲載する。

(1) 「国語科教育学の内容・技能・方法の習得」に関して

- ① 「大造じいさんとがん」という実際の題材をもとに、学習指導案の書き方や、国語科教育学の知識の習得、模擬授業の経験、観察をすることができた。
- ② 他の講義では指導案の作成方法や模擬授業をしたことがないので、とても勉強になりました。実際に模擬授業をしたことで、授業というものが少しわかったと思います。
- ③ この講義では、他の指導法よりもより実践的な内容を学ぶことができ、教師に対してのあこがれや自分の未熟さを感じることができた。
- ④ 先生が1分間スピーチをされているのは、とても聞きやすい話し方でした。見習わせていただきます！
- ⑤ 「ごんぎつね」の朗読、とても良かったです。あんなに臨場感あふれる朗読をしてくださる先生は私には出会ったことがないので、私もがんばろうと思いました。
- ⑥ 実際にスピーチをしたり授業を行ったりして、やはり自分自身が経験しなければわからないことを学ぶことができました。

(2) 「教員としての基本的な指導技術」に関して

- ① 先生の話し方は聞き取りやすく、大切なことをきちんと言ってくれた。話し方の基本を身をもって学ぶことができた。
- ② この授業は、先生の話はとても聞きやすかった。それは、話すスピードや声の大きさ・質がとてもちょうどよいものだったからである。しっかり教えられた授業である。
- ③ すべての回の講義の目的が明確で、筋がしっかり通っていたので理解しやすかった。特に毎回のプリントにはわかりやすい工夫がマンサイだった。

(3) 「国語教師としての基本的な姿勢」に関して

- ① 先生は他のどの科目の先生よりも熱心に、現場に出た時のことを考えて授業をしてくださりました。
- ② 諸活動を行うたびに先生がほめてくださることがとても嬉しく、意欲につながりました。
- ③ 先生が私たちに対して、真剣に向き合い対応してくれたことがとても心強かったです。
- ④ 先生のまず否定から入らない姿勢を見習っていきたいです。
- ⑤ 15回の授業を通して、国語だけではなく、「授業」すべてにおいて求められるものや教師のあり方についてたくさんのことを学ばせていただきました。

これらの受講生からの評価から、「2 『初等国語科指導法』における授業改善の視点と方法」に示した、「(1) 課題解決型の授業を展開できる能力の育成を図る」「(2) 自らの授業を課題解決型の『メタ授業』として提示する」「(3) 教育実習と大学とを有機的に連携させる」の三点は一定の成果をあげることができたと考える。

今後の授業実践上の課題として、以下の二点を挙げたい。第一点は、先学の優れた理論や方法の紹介を、さらに充実させることである。教育実習、さらには教育現場との連携を念頭に置いた授業づくりは確かに大切である。しかし、大学の授業である限り、学問的な探究を目指すものでなくてはならないのは当然である。受講生に「授業スキル」習得のための授業と認識・自覚されないよう、豊かな国語科教育の理論・方法を一層活用していきたい。第二点は、さらに言語活動を充実する授業展開を工夫することである。国語科教育学の理論・方法と、吉田の教員としての知識・経験の双方をモデルとして、「なすことによって学ぶ」授業を展開していきたい。そのために、通常の授業展開を、[講義→演習][研究発表→協議]という流れだけではなく、「10分程度でコンパクトな模擬授業を実施する」「様々な形態の音読を体験させる」など、多様な言語活動をさらに積極的に取り入れていきたい。

## おわりに

「学習指導案の書き方を教える」「授業の方法を教える」だけでは、「授業スキル」をマニュアル化して教授するだけになってしまう。今後も、「実践に役立つ」能力を身につけさせるために、受講生自らが「『学習指導案の書き方』『授業の方法』を自分で考える方法を教える」授業を創造していきたいと考えている。

## 引用文献

- 今井敏博(1998)「教員免許取得希望学生の教育実習後の『大学と教育実習』についての意識」『和歌山大学教育学部教育実践研究指導センター紀要』No.8, 121-124
- 世羅博昭(2003)「目標の三層構造化を図った学部授業の試み—『初等国語科授業論』を中心に—」『鳴門教育大学授業実践研究』第2号, 29-36
- 町田守弘(2008)「『国語科教育法』をどのように扱うか—『メタ授業』としての要素を生かすために—」『早稲田大学教育学部 学術研究(国語・国語学)』第56号, 1-14

